

## 資料

## 高齢者の町内会活動への参加に関する文献検討

辻 幸美・高岡 哲子

(2021年1月7日受稿)

**抄録：**【目的】本研究は、高齢者と町内会を対象とした研究の文献検討を行い、高齢者が町内会活動をどのように考え、参加しているのかを明らかにする。【方法】医学中央雑誌 web 版 Ver.5 で Key word, 「町内会」「高齢者」で「and」検索した結果から、方法論が不明確な文献などを除外し 44 件を分析対象とした。文献はマトリックス方式で整理した。「中心テーマ」は内容の類似性にあわせてカテゴリー化した。【結果及び考察】「中心テーマ」のカテゴリーは【高齢者とのネットワークづくり (4)】【高齢者に関わる人や組織の役割 (6)】【在宅高齢者の特徴 (10)】【周囲が期待する高齢者の役割 (3)】【日常生活に支援を要する高齢者への支援 (3)】であった。このように、町内会に関する研究では高齢者が地域で過ごすことをサポートする研究と高齢者が役割を担うことを期待する研究が行われていた。今後は、住み慣れた地域で高齢者が過ごすことを支えながらも、社会において高齢者に能力を発揮してもらうことを実現するための研究が必要であると考えた。

キーワード：高齢者、町内会、文献検討

## I. 緒言

町内会とは、町内に組織される住民の自治組織で、第2次世界大戦中に制度化された地方行政の補助機関であり<sup>1)</sup>、隣組組織として住民統制の一端を担ったものであった<sup>2)</sup>。1947年GHQが解散命令を出したが、1952年のサンフランシスコ講和条約が発効<sup>3)</sup>すると、町内会は各地で再結成され現在も存在している。町内会の役割は、地域で発生する生活上の問題を少しでも解決していきこうと、住民が協力して取り組むことであり、このような活動を通して地域環境を良好に維持していくことである<sup>4)</sup>。2015年インターネットによる朝日新聞の調査<sup>5)</sup>において自治会・町内会は必要か不要かのアンケート調査 (n=1967) で「必要」28.3%、「不要」34.4%と「不要」が多かった。しかし、家族の単位も大家族から核家族へと移行し、高齢者の単独世帯が増加、高齢化率も2016 (平成28) 年で27.3%<sup>6)</sup>と世界有数の長寿国となった現在<sup>7)</sup>、地域社会の変化に伴い生活上の問題も

変化していると推測する。地域の高齢化と核家族化に伴い、人間関係が希薄になった<sup>8)</sup>と言われているが、阪神淡路大震災 (1995年) や東日本大震災 (2011年)、台風などの自然災害など、近隣地域で協力しなければならない場面が増加している。このように生活上の問題の変化や地域の協力体制を強化するためにも、町内会の存在が重要となる。

このような中で、元気な高齢者の増加に伴い、65歳以上就業者が右肩上がり<sup>9)</sup>であり、ボランティアなどの活動を行っている高齢者も2017年現在、約700万人を超えている<sup>10)</sup>。元気な高齢者の能力を活用することで町内会が活性化されることが期待できる。しかし、町内会も地域在住高齢者も独居高齢者の増加などの理由で、持っている能力を発揮できていないのではないかと考えた。町内会において、高齢者がその役割を発揮することで、本来の町内会としての役割である、生活上の問題解決や住民同士が協力し合い、地域住民の

生活が豊かになることにつながるものと考えた。

## II. 目的

高齢者と町内会を対象とした研究の文献検討を行い、町内会活動の内容と、参加者の考えを明らかにすることである。

## III. 研究方法

### 1. 対象となる文献の抽出

医学中央雑誌Web版Ver5で、年代の制限なくKey wordは「高齢者」「町内会」で「and」検索を行い「原著論文」「会議録は除く」で絞り込みを行った(2019.11)。検索の結果、得られた文献は55件であった。本研究では高齢者に関連しない研究、研究方法が不明確である合計11件を除外して44件を分析対象とした。

### 2. 分析方法

44件の文献を文献レビューのマトリックスの方式<sup>11)</sup>で整理した。無秩序の中から秩序を作り出すためのマトリックス方式は、体系的に文献をレビューするための構造であり過程でもある。構造は文献レビューしながら集めた基本フォルダからなる。本研究では基本フォルダの縦軸を文献、横軸を「掲載年」「研究の焦点」「目的」「対象者及び協力者」「研究デザイン」「研究方法」「結果」「考察」「結論」として全体を概観した。さらに「研究の焦点」については、各文献を精読して研究の焦点をコード化した。抽出されたコードを意味内容の類似性に合わせて内容分析の手法を用いてカテゴリー化を行った。

## IV. 結果

研究の焦点を表1に示す。

### 1. 高齢者とのネットワークづくり

【高齢者とのネットワークづくり】の「高齢者と周囲の人々との交流(7)」は、後期高齢者の世代間交流と生活機能との関連<sup>12)</sup>や、高齢者の近隣とのかかわり方と支えあいへの意識<sup>13)</sup>、大都市近郊団地における高齢者の地域参加<sup>14)</sup>、外出頻

度の低い「閉じこもり」高齢者の特徴<sup>15)</sup>などから抽出された。田中ら<sup>12)</sup>は、「町内会等での特定の役割を担う」が世代間交流に影響していることを明らかにしていた。澤岡ら<sup>13)</sup>は、関わり方と支え合いへの意識に関する研究で、「あいさつをときどきする」「町内会・自治会活動に年数回程度の参加」でも、近隣との支え合いへの意識を高めていることが示されていた。Murayama elt<sup>16)</sup>は、地域在住高齢者6,421名を対象とした調査結果で、町内会活動の参加率は82.4%であることを報告した。乗田ら<sup>17)</sup>は、町内会より依頼があった教室活動の結果、以前よりも住民同士が見守り合える関係を築く事ができたこと、船山ら<sup>18)</sup>は定年後に行いたい活動では「自治会・町内会活動」については6割以上の者が参加したくないと考えていたことを報告し、安田<sup>14)</sup>は大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加について報告していた。

【高齢者の活動実態(6)】は、高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動に関する研究<sup>19)</sup>や、高齢者事業に参加する高齢者の地縁的活動<sup>20)</sup>研究が行われていた。岡本<sup>21)</sup>は、市川市における高齢者の活動と心理的well-beingの関連で社会活動領域では「近所づきあい」「町内会・自治会」「地域行事」の3つの活動が、心理的well-beingの3指標(生活満足度、生きがい感、日頃の活動満足度)すべてと関連が認められたと報告していた。竹内ら<sup>22)</sup>は、町内会の仕事を辞めた頃から、無気力と興奮気味の日が交互に出現したと報告していた。

【高齢者の社会参加(6)】は、地域在住の高齢者における社会参加と手段的日常生活動作との関連<sup>23)</sup>や高齢者の心身状況と社会関連性指標の特徴<sup>24)</sup>などの高齢者の社会参加の実態を把握する研究が行われていた。安齋ら<sup>25)</sup>は、支援介護が必要な地域在住高齢者2,000名を対象として、社会活動への参加は、「町内会や自治会活動」が35.4%と最も多かったことを報告していた。また、Tomioka elt<sup>26)</sup>は、高齢者が社会活動に参加する際、自発的な姿勢を示すことが自己評価健康度につな

がったと報告していた。

**2. 在宅高齢者の特徴と日常生活に支援を要する高齢者への支援**

【在宅高齢者の特徴】に含まれていた[高齢者の健康状態 (3)]は、町内会単位の健康作り活動の有効性として、約半年間の活動効果について聞き取り調査を行なった結果、13人中2/3以上が指摘した「健康の駅」活動による効果は健康作りを過度に意識せず自然に健康意識が高まるような活動内容とすることが大切と考えられた<sup>27)</sup>。在宅高齢者(69～71歳)の7割余りは何らかの病気を有していたが多くはADLが良好であり、痴呆症状が見られる者もほとんどいなかったと報告している<sup>28)</sup>。鈴木ら<sup>29)</sup>は、独居高齢者の町内会活動不参加が41.5%、近所付き合いなしが25.3%あり、地域コミュニティネットワークの希薄化が考えられた。[高齢者の主観的幸福 (2)]は、健康教室に参加した高齢者の主観的健康観への関連要因<sup>30)</sup>や都市部住民の生活像とサクセスフルエイジングの要件<sup>31)</sup>によって抽出された。後藤ら<sup>30)</sup>は、健

康教室に参加した高齢者の主観的健康観への関連要因として、「心臓病の既往がない」「町内会へよく参加する」ことを明らかにした。また、岡山ら<sup>31)</sup>は、健康づくり等の主体的な活動と町内会等の役割としての活動が多かったと報告した。[高齢者の生活状況 (2)]は大都市近郊に居住する高齢者が感じる生活圏<sup>32)</sup>や被爆者の生活状況と死亡との関連<sup>33)</sup>によって抽出された。大畑ら<sup>32)</sup>は、大都市近郊に居住する80歳代高齢者が感じる生活圏は自治会・町内会と最も狭い範囲に縮小したと報告した。三根ら<sup>33)</sup>は、被爆者の生活状況と死亡との関連の研究において調査期間中の死亡は387名で町内会の役割なし(1.23倍)であったと報告した。

【日常生活に支援を要する高齢者への支援】に含まれていた[要介護者の実態 (3)]は、在宅パーキンソン病患者の災害時要援護者登録に関する研究<sup>34)</sup>や在宅酸素療法患者の最大歩行距離と外出頻度の関連<sup>35)</sup>などの研究によって抽出された。長瀬ら<sup>36)</sup>は女性では「地域の祭り」「町内会・自

表1 研究の焦点

カテゴリー	コード	コード数
高齢者とのネットワークづくり	高齢者と周囲の人々との交流	7
	高齢者の活動実態	6
	高齢者の社会参加	6
在宅高齢者の特徴	高齢者の健康状態	3
	高齢者の主観的幸福	2
	高齢者の生活状況	2
日常生活に支障を要する 高齢者への支援	要介護者の実態	3
	介護予防支援	2
周囲が期待する 高齢者の役割	ボランティア活動	3
高齢者にかかわる人や 組織の役割	高齢者の主体性	1
	高齢者の見守りの役割	3
	地域力の充実	2
	高齢者の在宅生活の継続	1
	地域コミュニティの住民同士のつながり促進	1
	地域特性を生かした活動 認知症早期発見・支援	1

治体の行事」「趣味や習い事等」に参加しない者が低栄養リスク群との関連がみられたことを報告していた。〔介護予防支援 (2)〕は、地域組織参加率と要支援・介護認定率の関連 (1)、介護予防に関する住民ニーズ (44) に関する研究によって抽出された。

### 3. 周囲が期待する高齢者の役割と高齢者にかかわる人や組織の役割

【周囲が期待する高齢者の役割】は〔ボランティア活動 (3)〕〔高齢者の主体性 (1)〕によって構成されていた。〔ボランティア活動 (3)〕は、傾聴ボランティア活動参加者のうち女性は、町内会や自治会活動に参加している者が多かったと報告していた。〔高齢者の主体性 (1)〕では、高橋ら<sup>37)</sup>が、地域の団体・組織・会とのかかわりは、男女とも「町内会・自治会」「老人会・高齢者団体」に入っている割合が高かったと報告していた。

【高齢者にかかわる人や組織の役割】に含まれていた〔高齢者の見守りの役割 (3)〕は、大都市における高齢者の見守られ意向と見守られたい相手<sup>38)</sup>やスマートフォンを活用した高齢者の見守りに対する大都市の住民の意識<sup>39)</sup>、設置主体別にみる地域包括支援センターにおける認知症早期発見・支援に関する課題<sup>40)</sup>、高齢者が地域で安心して暮らすための見守りに関する高齢者の意識<sup>41)</sup>などによって抽出された。以下〔地域力の充実 (2)〕〔高齢者の在宅生活の継続 (1)〕〔地域コミュニティの住民同士のつながり促進 (1)〕〔地域特性を生かした活動 (1)〕〔認知症早期発見・支援 (1)〕と続いた。

## V. 考察

### 1. 高齢者のネットワークづくり

【高齢者のネットワークづくり】に含まれていた〔高齢者の活動実態 (6)〕のように実態把握が行われ、〔高齢者と周囲の人々との交流 (7)〕や〔高齢者の社会参加 (6)〕が抽出された。横山ら<sup>15)</sup>は、外出頻度の低い高齢者の特徴に関する研究の中で、「閉じこもり」と有意な関連を示したものに「町

内会への参加」があったことを報告した。このように、町内会へ参加することは、閉じこもり予防につながるため、高齢者の活動とネットワークづくりや社会参加に関連した研究が行われていたと考える。

田中ら<sup>12)</sup>は、町内会などで特定の役割を担うことが世代間交流に影響していることを明らかにしていた。これは高齢者が町内会の役割を担えることを示し、さらにネットワークづくりにもつながっていることがわかる。高橋ら<sup>37)</sup>は、東北地方の在宅高齢者を対象とした研究では「町内会・自治会」に加入している割合が高いと報告していた。一方で、船山ら<sup>18)</sup>は定年前中高年者の6割以上の者が「自治会・町内会活動」に参加したくないと考えていたことを報告した。さらに一定の地域の独居高齢者を対象とした研究では、町内活動不参加の割合が約4割で、地域コミュニティネットワークの希薄化が考えられたと報告していた<sup>29)</sup>。町内会参加は主観的健康観を向上させ<sup>30)</sup>、役割を担うことは世代間交流に影響している<sup>12)</sup>ように、健康や行動拡大に関連しているため積極的な参加につながるような工夫が必要である。

### 2. 在宅高齢者の特徴と日常生活に支援を要する高齢者への支援

町内会団体への加入者の中でも7割余りは何らかの病気を有していた高齢者であったが、町内会活動に参加し、ADLが良好で認知症症状がみられる者は、ほとんどいなかったという結果<sup>28)</sup>から、病気を持っていてもQOLを高める生活をしていることが考えられた。また、町内会単位の健康作りでは「集まって話をしたい」人が多い<sup>27)</sup>ことから、健康を意識している高齢者は多くいることが推察できる。一方、独居高齢者の6割近くが町内会活動不参加や近所付き合いなしという結果<sup>29)</sup>から、町内会活動参加は良いと分かっているにもかかわらず、独居だと情報もなく不参加だったり、近所付き合いをしなかったりするのではないかと考える。

### 3. 周囲が期待する高齢者の役割と高齢者にかかわる人や組織の役割

【周囲が期待する高齢者の役割】では〔ボランティア活動 (3)〕と〔高齢者の主体性 (1)〕が抽出されていた。地域においては、様々な団体があり、高齢者が所属している。そこでは高齢者には主体的に新たな活動場面へ参加することが期待されている。またボランティアにおいても高齢者の役割として能力を発揮することにつながるものとする。よって、現状の役割だけではなく、新たに高齢者自身の持てる力を十分に発揮できる場を地域住民だけではなく高齢者自身も主体的に考え活動の場が広げられるように支援する必要がある。

【高齢者にかかわる人や組織の役割】では、〔高齢者の見守りの役割 (3)〕が抽出された。高齢者の見守りは、セコム・ホームセキュリティ<sup>42)</sup>などが高齢者見守りサービスとして商品化されていた。また、象印はみまもりホットラインとして湯沸かしポットを使用した商品<sup>43)</sup>などを開発し実用化されている。このように高齢者の見守りは人を介してではなく、センサーなど様々な商品によって行われている。「挨拶を時々すること」や「町内会自治会活動に年数回程度参加」するだけでも、近隣との支えあい意識を高められる<sup>13)</sup>を考えると、少しの手間で見守りができる環境づくりを町内会が主体的に行うシステム作りが重要となると考える。

## VI. 結論

本研究により以下の点が明らかになった。

1. 研究の焦点として、【高齢者とのネットワークづくり】【在宅高齢者の特徴】【日常生活に支援を要する高齢者への支援】【周囲が期待する高齢者の役割】【高齢者にかかわる人や組織の役割】の5つのカテゴリーが抽出された。
2. 高齢者の行動拡大や健康の維持増進のためにも町内会への参加や役割を持つことが重要となるため、積極的な参加につながる工夫の必要性が示唆された。

## 文 献

- 1) 日本国語大辞典第2版編集委員会：日本語供御大辞典第2版第9巻 p 90, 2009.
- 2) 竹本康彦：町内会・自治会加入状況改善のための活動の見えるかと仕組みづくりにする一考察, 県立広島大学経営情報学部論集, (10)：115-127 (2017).
- 3) 厚生労働省：“隣組”ってなんですか？～助けられたり助けたり～；2016年8月7日現在 (<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12101000-Shakaiengokyoku-Engo-Engokikakuka/0000130447.pdf>, 2020.2.29)
- 4) 草津市：町内会の意義・役割；2020年現在 (<https://www.city.kusatsu.shiga.jp/kurashi/chikicomunity/chonikai/chonikai.files/sankou.pdf>, 2020.2.29)
- 5) 朝日新聞：自治会・町内会は必要？不必要？；2015年10月19日現在 (<https://www.asahi.com/opinion/forum/013/>, 2020.2.26)
- 6) 厚生労働省：高齢社会白書；平成30年度版 ([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf), 2020.2.29)
- 7) 内閣府：高齢化率；2016年度版 ([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1\\_1\\_2.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_1_2.html), 2020.2.29)
- 8) 北川公子代表：系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学，超高齢社会の現況，24-27，医学書院，東京（2018）。
- 9) 厚生労働省：高齢社会白書；平成30年度版 ([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s2s\\_04.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s2s_04.pdf), 2020.2.29)
- 10) 公益財団法人長寿科学振興財団：健康長寿ネット「高齢者のボランティア」；2016年度版 (<https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/syogaigeneki/koreishavolunteer.html>, 2020.2.29)
- 11) Judith G, 訳, 安部洋子：看護研究のための文献レビューマトリックス方式, 14, 医学書院, 東京 (2015).

- 12) 田中富子, 竹田恵子: 中山間地域で生活する後期高齢者の世代間交流と生活機能の関連性. 川崎医療福祉学会誌, 26 (1): 37-47 (2016).
- 13) 澤岡詩野, 渡邊大輔, 中島民恵子, 大上真一: 都市高齢者の近隣との関わり方と支え合いへの意識—非常時と日常における近隣への意識に着目して—. 老年社会科学, 37 (3): 306-315 (2015).
- 14) 安田節之: 大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加. 老年社会科学, 28 (4): 450-463 (2007).
- 15) 横山博子, 芳賀博, 安村誠司, 蘭牟田 洋美, 植木 章三, 島貫 秀樹, 伊藤 常久: 外出頻度の低い「閉じこもり」高齢者の特徴に関する研究自立度の差に着目して. 老年社会科学, 26 (4): 424-437 (2005).
- 16) Murayama H, Nofuji Y, Matsuo E, Nishi M, Taniguthi Y, Fujiwara Y, Sinkai S: The Yabu Cohort Study: Design and Profile of Participants at Baseline. *Journal of Epidemiology*, 24 (6): 519-525 (2014).
- 17) 乗田雅也, 北原博之, 加藤祐子, 松嶋瑛子: 孤立しない環境作りにおける成果と課題. 北海道社会保険病院紀要, 11: 17-18 (2012).
- 18) 船山和志, 堀口逸子, 岡利香, 平智子, 齊藤博, 鈴木敏旦, 丸井英二: 横浜市K区における、健康づくりに関連した定年前中高年者の定年後の意識について (第2報) 量的調査の結果より. 厚生 の 指 標, 55 (6): 23-27 (2008).
- 19) 斎藤民, 近藤克則, 村田千代栄, 鄭丞媛, 鈴木佳代, 近藤尚己: 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差JAGESプロジェクトから, 日本公衆衛生雑誌, 62 (10): 596-608 (2015).
- 20) 及川真子, 佐伯和子, 平野美千代: 札幌市A区在住の高齢者事業参加者の地縁的活動の実態. 北海道公衆衛生学雑誌, 28 (2): 69-76 (2015).
- 21) 岡本秀明: 市川市における高齢者の活動と心理的well-beingの関連. 和洋女子大学紀要, (50): 41-53 (2010).
- 22) 竹内賢, 丹羽真一: 約30時間周期の睡眠・覚醒リズムを呈した非24時間睡眠・覚醒症候群の1例. 精神医学, (43) 11: 1245-1247 (2001).
- 23) Tomioka K, Kurumatani N, Hosoi H: Association Between Social Participation and Instrumental Activities of Daily Living Among Community-Dwelling Older Adults. *Journal of Epidemiology*, 26 (9-10): 553-561 (2016).
- 24) 近藤重弥, 高橋通江: A市B町内会地域に居住する高齢者の心身状況と社会関連性指標の特徴. 旭川大学短期大学部紀要, (46): 19-32 (2016).
- 25) 安齋紗保理, 佐藤美由紀, 池田晋平, 柴喜崇, 植木章三, 芳賀博: 地域在住の虚弱高齢者における社会活動に関連する要因. 老年学雑誌, 8: 17-31 (2018).
- 26) Tomioka K, Kurumatani N, Hosoi H: Association between the frequency and autonomy of social participation and self-rated health. *Geriatrics & Gerontology International*, 17 (12): 2537-2544 (2017).
- 27) 高橋和幸: 社会福祉の観点から見た町内会単位の健康作り活動の有効性秋田県横手市上真山町内会における「健康の駅」活動を事例に. 秋田県農村医学会雑誌, 51 (1): 5-13 (2005).
- 28) 江口照子, 岸玲子, 笹谷春美, 矢口孝行: 札幌の在宅高齢者 (69 ~ 71歳) の健康状態. 北海道公衆衛生学雑誌, 9 (2): 215-223 (1996).
- 29) 鈴木修治, 畑山明美, 横田節子, 井上知加子, 芳賀博: 仙台市宮城野区内T地区における独居高齢者の健康と生活実態に関する調査. 厚生 の 指 標, 51 (13): 33-37 (2004).
- 30) 後藤順子, 細谷たき子, 小林淳子, 叶谷由佳:

- 健康教室に参加した高齢者の主観的健康観への関連要因. 日本地域看護学会誌, 14 (1) : 30-39 (2011).
- 31) 岡山寧子, 小松光代, 大西早百合, 堀井たづ子, 阿部登茂子, 佐藤卓利, 谷垣静子, 飯降聖子, 福間和美: 都市部住民の生活像とサクセスフルエイジングの要件. 京都府立医科大学看護学科紀要, 12 (2) : 121-129 (2003).
- 32) 大畑政子, 萱場一則, 丸山優, 大塚真理子: 大都市近郊に居住する高齢者が感じる生活圏. 日本公衆衛生雑誌, 53 (12) : 899-906 (2006).
- 33) 三根真理子, 柴田義貞, 横田賢一, 吉峯悦子, 本田純久, 近藤久義, 太田保之: 被爆者の生活状況と死亡との関連. 広島医学, 57 (4) : 342-344 (2004).
- 34) 宇田優子, 石塚敏子, 三澤寿美, 村山伸子, 瀧口徹: 在宅パーキンソン病患者の災害時要援護者登録に関する研究. 日本災害看護学会誌, 16 (3) : 2-13 (2015).
- 35) 佐藤忍, 塚本東明, 池田英樹, 佐山恒夫, 高橋牧郎, 菅原保, 伊藤英三, 奥村浩, 木村久男: 在宅酸素療法患者の最大歩行距離と外出頻度の関連. 日本呼吸器学会雑誌, 36 (1) : 46-52 (1998).
- 36) 長瀬香織, 田中和美, 磯部壮一郎, 高田健人, 中原慎二, 市川政雄, 杉山みち子: 神奈川県Y市在住要支援高齢者の低栄養リスクと「料理・買い物状況」及び「地域とのつながり」との関係. 日本健康・栄養システム学会誌, 17 (2) : 31-41 (2018).
- 37) 高橋和子, 安村誠司, 矢部順子, 芳賀博: 東北地方の在宅高齢者における地域・家庭での役割の実態と関連要因の検討. 厚生指標, 54 (1) : 9-16 (2007).
- 38) 仁村優希, 佐伯和子, 青柳道子: 大都市における高齢者の見守られ意向と見守られたい相手. 日本公衆衛生看護学会誌, 6 (3) : 268-277 (2017).
- 39) 仁村優希, 水野芳子, 久富沙織, 瀧澤莉代, 三宅杏, 齋藤芳子, 佐伯和子: スマートフォンを活用した高齢者の見守りに対する大都市の住民の意識. 北海道公衆衛生学雑誌, 30 (2) : 55-61 (2017).
- 40) 平澤園子, 王吉とう, 樋田小百合, 三上章允: 設置主体別にみる地域包括支援センターにおける認知症早期発見・支援に関する課題. 愛知高齢者福祉研究会誌, (3) : 49-62 (2016).
- 41) 瀧澤莉代, 久富沙織, 仁村優希, 三宅杏, 水野芳子, 齋藤芳子, 佐伯和子: 高齢者が地域で安心して暮らすための見守りに関する高齢者の意識. 北海道公衆衛生学雑誌, 28 (2) : 77-84 (2015).
- 42) セコム: セコムセキュリティ; 2020年2月29日現在 (<https://www.secom.co.jp/homesecurity/plan/seniorparents/>, 2020.2.29).
- 43) ZOJIRUSHI: お年寄りの元気な生活をそっとみまもるみまもりほっとライン; 2020年2月29日現在 (<https://www.mimamori.net/product/#m-tl>, 2020.2.29).

## A Literature Review on Elderly Persons' Participation in Neighborhood Association Activities

TSUJI Yukimi and TAKAOKA Tetsuko

**Abstract:** [Purpose] This study examines the literature of studies targeting the elderly and neighborhood associations, and clarifies how the elderly think about and participate in neighborhood association activities. [Methods] The Ichushi Web database (Ver. 5) was searched for articles using the keywords “community associations” and “elderly people” combined by “and”. Excluding articles that did not describe methodologies clearly, 44 articles were analyzed. The articles were organized and examined by the matrix method. “Core themes” were categorized based on similarities of meaning in descriptions. [Results and Discussion] The categories of the “Core theme” include [Networking with the elderly (4)], [Roles of people and organizations involved with the elderly (6)], [Characteristics of the elderly at home (10)], [ Roles that people around them expect of the elderly (3)], and [Support for the elderly who need assistance in daily life (3)]. It was found that there have been studies focusing on support to assist the elderly living in local communities and also studies focusing on the roles the elderly are expected to play. The findings suggest the necessity to conduct further studies to enable the elderly to utilize their skills in the community where they live while assisting them in living in the community they are familiar with.

Keywords: elderly, community associations, Literature review